

人権・同和教育シリーズ 172

市民の手による「まちづくり推進委員会」の活動

地域人権教育指導員 稲田京子

問い合わせ先 人権啓発課
0968(25)7209

本市には、これまで大事にしてきた誇るべき活動がいくつもあります。その一つが「まちづくり推進委員会」の活動です。

良い啓発になるよう意見や助言をする活動もしています。

「まちづくり推進委員会」の活動

まちづくり推進委員会

毎年、市から18人の方が委嘱され「まちづくり推進委員会」が設置されています。市内13各区の校区推進会議、人権擁護委員会・民生児童委員会・身体障がい者福祉協議会・女性の会・自治公民館長会などからそれぞれ推薦された人々です。

人権問題について学び、一人一人が大切にされる「差別のない明るいまちづくり」の実現のため、地域で主体的に活動できる人材を目指し、年間8回の研修を行っています。研修では、

当事者からの差別の実態や現地に学ぶことなどを大事にしています。

12月の「市人権フェスティバル」では、スタッフとして運営に携わりました。人権啓発リーフレット「ふるさと」（年3回発行）や広報きくち「人権・同和教育シリーズ」について、より

主な研修内容―現地に学ぶ

① 市内の障がい者福祉施設「ひまわり」や障がい者支援センター「まるくわ」などで生き生きと働いている姿を直接見せていただき、職員の人たちの思いや願いなどを聴きました。特別養護老人ホーム「つまごめ荘」や知的障がい者支援施設「居屋敷の里」では、個人に合った配慮をしながらサポートをしている様子を見聞きし、高齢者や障がい者の人権を守るための具体的な取り組みを学ぶことができました。

② 9月、教育集会所で部落解放同盟の松永末廣旭志支部長の講話を聴きました。参加者から「フィールドワークに参加して、

同和対策事業によって自分たちの地区だけでなく、隣接している他の集落も道路などが改善され、周囲も一緒に良くなって、広く地域全体が改善されてきたことを初めて知りました」「部落差別の現実を学び、正しい認識を深め、差別をなくすよう推進

学んで発信し続ける



松永末廣旭志支部長の講話

活動を心強く感じています。

身近なところに、みんなの幸せを願って差別をなくし、暮らしをよくするために生き生きと踏み張っている人がいます。そんな人たちの生き方に学びながら、発信し続ける会員の地道な活動を心強く感じています。



韓国発見シリーズ⑦ 「ママ虫」は金です



国際観光マネージャー 金相廷

韓国の女性が直面するガラスの壁

女性差別をテーマにした小説「82年生まれ、キム・ジヨン」が映画化され去年10月に公開された。上映2週間で300万人を動員し大ヒットとなった。2018年には日本でも翻訳出版され、すぐにアマゾンジャパンのアジア文学部門の売上高で1位になった。日本で韓国文学がここまで注目されることは異例のことだという。NHKでもドキュメンタリーが放映され、多くの日本女性たちから共感を

得ている。

この小説は1982年生まれの女性主人公キム・ジヨンさんを取り巻く家庭や職場また韓国社会、結婚後の婚家での立場などで女性であるが故に受ける抑圧、理不尽をリアルに描いた作品である。

後には「ママ虫」(自己中心ママ虫)と卑下され、見えないガラスの壁が彼女を取り囲んでいる。今の韓国社会が女性に向ける冷たい視線、見えな

彼女が最も深刻だった時代に生まれ、女性が受けるさまざまな抑圧に直面して生きていく。厳しい就職競争を突破してキャリアを積むが、社内では有能ゆえに煙たがられる。結婚し妊娠すると「経断女」(出産や育児で職場を離れキャリアが断たれること)となり、出産

実際、最近の韓国では女性芸能人の自殺がたびたび起きています。彼女たちに対する容赦ない攻撃はSNS上では異常で止まるところを知らない。この点について建國大学ユンキム・ジョン教授はインタビューで「悪質な書き込みの根源には社会が要求する女性像を規定し、これに合わない女性に向けて行う女性嫌悪があるのです。こうした観点からみれば、悪質な書き込みは従順ではない若い女性を私たち社会が断罪していると分析することができると答えた。

人には良心があり、基本的な道徳心や温かい思いやりが備わっているはずなのに、他人を自分の物指しで測り、外れると攻撃し鬱憤を晴らす結果を韓国社会はどう償うのだろうか。それでも人間の心の深いところには純粋な心があると信じたい。

後には「ママ虫」(自己中心ママ虫)と卑下され、見えないガラスの壁が彼女を取り囲んでいる。今の韓国社会が女性に向ける冷たい視線、見えな